



に翻訳され、分断を乗り越える同氏の思いは世界各地で共有されている。

広島を訪れて

戦争の悲劇が刻まれた広島に平和のメッセージを携えて訪れたアブレライシユ氏は、講演の席上、次のように来場者に呼び掛けた。

「広島や長崎、そして日本の皆さんは、戦争の経験を通して死の中から懸命に生命をつくり上げてこられました。

そして敵対するのではなく、より強い武器として平和への決意を携え、知恵をもって勇敢により良い行動をとりながら前進してきました。その行動は多くの人の心に共鳴しています。ぜひその希望を世界に広めていってほしいと願います」

同氏の講演の後、何人かの関係者から感想が述べられた。その中の一人、公明党の谷合正明参議院

議員はこう語った。

「アブレライシユ氏が語る『憎しみの対局は教育である』との考えに私も強く共感します。私も中東支援に携わる議員として、これまで、ガザの子どもたちを日本に招いたほか、中東の難民の人たちが日本の大学に留学できるように働きかけてきました。それが実り、今年八月にはシリア難民の留学生三〇人ほどが日本に留学しに来ています。また、これまで日本政府が支援してきたイスラエルとパレスチナの二〇代、三〇代の若者た



謝辞を述べた後、アブレライシユ氏と握手を交わす谷合議員

ちの交流事業(イスラエル・パレスチナ合同青年招聘事業)は今年で二〇周年を迎えました。これからも教育の視点を大切にしながら、中東平和のために尽力していく決意です」

アブレライシユ氏は、教育の観点に立った上での女性の教育の重要性を訴え、現在は、中東の女性に教育を提供するための基金を設立している。

「女性によつてこの世界はより平和的なものになることができます。そのためには教育が重要です。健全な教育が健全な家庭をつくり、健全な地域社会をつくり上げていきます。ぜひ、中東で勉強する女性たちが日本の大学で勉強する機会をつくることに協力してください。そして、共に平和な未来をつくりていきましょう」

自身の悲劇と向き合う中で見つけた『それでも、私は憎まない』との平和へのメッセージが、平和の天地・広島から一人でも多くの人へと広がっていくことを願いたい。

から私は憎しみが私を支配することを拒絶するのです」(月刊『ハーストリー』二〇一四年四月号)

この言葉のとおり、アブレライシユ氏は、娘たちの命が一瞬にして奪われた悲劇を乗り越えて、憎しみの代わりに対話による平和への行動を開始したのだ。

アブレライシユ氏が自身の体験を綴った著書『それでも、私は憎まない』は現在、全世界の二三言語